

雷山神籠石「南水門」部の踏査結果及び 雷山神籠石に関する交通路について

瓜生 秀文（伊都国歴史博物館）

I. 雷山神籠石について

雷山神籠石は福岡県糸島市雷山・飯原間の山中に築かれた東西300m、南北700mほどの城域をもつ古代山城である（第1図）。そしてそれは、雷山（標高955m）の北中腹約400～480mを測る2つの尾根に挟まれた緩やかな勾配の沢筋に位置する。この尾根は雷山支脈のなかでもとりわけ北方向に突き出ているため、糸島地方のみならず博多湾や玄界灘まで広く一望できる景勝の地となっている（写真1、2）。遺構としては、現在、谷の南北に築かれた水門とそれから東西に派生する列石群をみることができる。

II. 雷山神籠石に関する研究史

（1）「神籠石」の研究史

「神籠石」¹とは福岡県久留米市に所在する高良山神籠石に代表されるように、列石が宗教上の神域と合致していたこと、その基本構造が列石と水門遺構に限られていたために、霊域を示すモニュメントと解され、その名称となった。しかし、1960年代に調査された佐賀県武雄市のおつぼ山神籠石²で、列石上に土塁、そしてその前面に柵列の痕跡が確認されたことや、朝鮮半島の古代山城の構造との類似点が指摘されてからは、山城としての認識が一般的となった。現在で

は北部九州から瀬戸内海沿岸にかけての西日本一帯で約十数例が確認されている。

こうした神籠石系山城は、いつ頃、誰が、どのような目的で築城されたか定かではない。以前は弥生時代終末期（邪馬台国時代）の砦であるとか、筑紫君磐井が大和政権に対抗して築城させたもの、など諸説があったが³、現在では朝鮮式山城と同様に7世紀の対外的な緊張関係の中で築城されたという理解に集約されつつある。ただし、その築城が大野城や基肄城などの「天智紀」に登場する朝鮮式山城に先行するのか、後出するのかは学界でも大きな問題となっている³。

先行説の多くは『日本書紀』の「斉明紀」4（660）は歳条「繕修城柵」の記事を神籠石系山城築城の根拠とする⁴。百済救援のために「朝倉宮」が造営され、それを拠点とする防衛網の一環として神籠石系山城が築城されたとする説である⁵。多くの神籠石系山城は663年の白村江の戦い後に未完成で放棄され、一部は修築され朝鮮式山城を補完するように並存したと考えられている。

後出説は、城の新旧の基準を城壁の防衛機能の面から考えず、石材加工技術の優劣に置く。また、その築城目的も対外防衛的な色彩が薄れ、「大宰・総領制」との関連⁶や律令制化に伴う地域支配の拠点へと変化していったと考えられている。

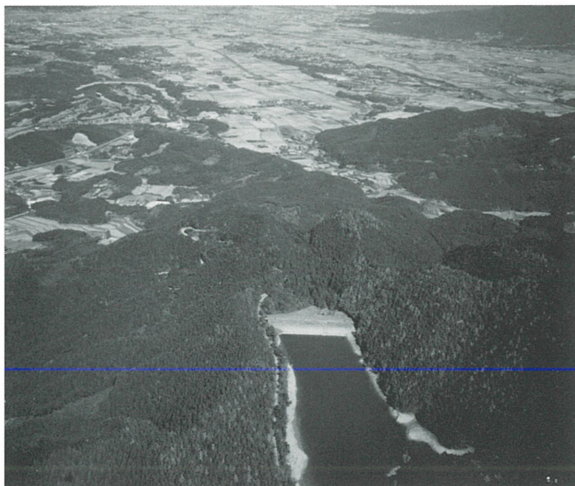


写真1 雷山神籠石より北側（怡土平野）を望む



写真2 雷山神籠石より南側（背振山脈）を望む

(2)．雷山神籠石の研究史

雷山神籠石の研究は江戸時代の貝原益軒に端を発する。宝永6年(1709)、貝原益軒は『筑前国続風土記』のなかで「雷村の西に怡土の城の址あり」と記し、雷山神籠石を怡土城と考えた。

天保9年(1838)、伊藤常足は『太宰管内志』の怡土城の項において「怡土城の趾は雷村の西にあり」と記し、貝原益軒の説を踏襲し、伊藤常足も雷山神籠石を怡土城と考えた。

江戸時代末になり、青柳種信は『筑前国続風土記拾遺』のなかで「怡土古城」の記述に「雷山の西の方山上(筒原)にあり」と記しており、青柳種信も雷山神籠石を怡土城と考えた。しかし、『筑前国続風土記拾遺』における「高祖古城」の記述には「凡上下城及所々矢倉址鐘撞等の跡に古瓦有。極めて古代の物なり。」とあり、高祖城と怡土城の遺構について誤解はあるものの、怡土城は高祖山に所在すると考える説の萌芽がみられる。

明治時代に入り、神籠石論争が起こり、雷山にある遺跡も神籠石の一つに数えられ、怡土城よりもさらに古い時代のもものと認められる。さらに、高祖山から奈良時代の古瓦等が出土し、高祖城が怡土城を再利用して築城されたということが実証された。それ以後、怡土城は高祖山に所在し、雷村の西にある遺構(雷山神籠石)は怡土城ではないとする説が正しいとされるようになった。

その後、小田部降叙⁷、島田寅次郎⁸、原田大六らによって調査・研究が進められた。

雷山神籠石に初めて遺構として記録が作成されたのは大正15年(1926)で、松尾繁人・島田寅次郎による。水門・列石の配置を示した測量図が作成された。この調査の結果をもとに、昭和7年(1932)に水門・列石に沿って前後幅10mが史跡に指定された。

昭和34年(1959)に原田は「神籠石の諸問題」⁹と題する論文を発表している。その中で原田は東アジア史の流れを踏まえた上で、『日本書紀』の敏達天皇12年条の記載や神籠石の分布状況を検証し、国家指導の下で大陸からの防御を目的として築造された山城であること、石材加工技術に終末期の巨石古墳築造技術との類似点がみられることなどから、その築造の時期を6世紀末と推定した。また、列石には土塁や木柵が未確認であったことをとりあげ、城塞としての機能に乏し

かったためにその機能を果たすことなく次代の本格的な朝鮮式山城に移行していったとする「神籠石愚城論」を展開した。さらに、神籠石が高地从ら低地へと推移していったという想定の下で、雷山神籠石が他の諸例に比べ高所に築造されていることや、水門構造の分析等をもとに神籠石の編年案を提示し、雷山神籠石を最古期のものと位置づけた。それはのちの神籠石研究に刺激を与えるとともに、その後の神籠石の調査・研究にも影響を与えている。

さらに、昭和35年(1960)に林道拡張のため、前原町教育委員会(現糸島市教育委員会)が主体となって、南水門に繋がる西側の列石の調査が行われ、原田がその調査の担当者となった。また、その成果の一部は『古代学研究』¹⁰で報告されている。

その後は、平成8年(1996)11月に前原市(現糸島市)を会場にして「雷山神籠石と怡土城の現状について」というテーマで古代山城研究会(第15回例会)が開催された。その際、有志により雷山神籠石の踏査を実施して、『溝瀆』第7号(1998年)において、瓜生がその結果を紹介している¹¹。

Ⅲ．踏査結果

雷山神籠石は雷山の中腹にあり、開発が進まなかったこともあって、昭和35年の調査以来、手つかずの状態であった。そのため、北水門と東西方向に派生する列石群、南水門と東西方向に派生する列石群等についての情報はあったものの、それ以外の情報については皆無の状態であった。そこで、現地を踏査して現状を再確認する目的で実施したのが平成8年(1996)年11月25日の古代山城研究会による踏査であった。

この踏査の結果、南水門部については雷山の二溪谷からの2筋の水流に対処するために、2箇所の水門(入水口)(西側に暗渠様式、東側に北水門と同様の石塁の中に水樋を構築する様式)が設置されていたと考えた。

その後も、自主的に踏査を続け、南水門部の城内側の列石の一部などを確認することができた。

また、数次に亘る踏査の結果、2箇所の入水口の間にテラス状遺構(写真3)が広がることが判明した。テラス状遺構は2箇所の入水口から1.5

mほど高いテラス状の平地になっており、その断面には幅約40～50cm、厚さ約20cmを測る人頭大の石材が自然堆積ではなく整然と組まれていることも確認できた。

そのテラス状遺構について、発見当初は2箇所の入水口に気をとられあまり注目していなかった。しかし、その後の踏査の結果、石材の組まれている範囲が北水門部の南北幅とほぼ同規格であることが判明した。さらに断面観察の結果、整然と石材が組まれており、そして2箇所の入水口との位置関係を考慮すると、自然の堆積とは考えにくく、2種類の入水口と構造的に何らかの関係があるのではないかと瓜生は考えた。

以上の諸問題を念頭に置きながら、平成22年(2010)11月20日に北垣聡一郎氏と雷山神籠石の踏査を行った。その結果、南水門部について新たな発見があった。以前の踏査結果もふまえて、雷山神籠石の南水門部の現時点における遺構の状態についてまとめてみたい。



写真3 テラス状遺構(南より)

(1). 南水門部のテラス状遺構について

平成8年(1996)11月25日の南水門部の踏査の際、東側の川筋部分については北水門と同様の石塁を築き、その一部に水樋を設けて溪谷からの水流を処理したと考えた(写真4)。この一帯には当地に構築された石塁の一部と考えられる石材が散乱しており、その表面はしっかりと整形されている。また、接合面から考えると、ここに構築された石塁も北水門と同様に「重箱積」ではなく「布積」工法で築かれたとも考えた(写真5)。

さらに、西側の川筋部分については、暗渠様式の水門を設置し、溪谷からの水流を処理したと想定した(写真6)。

以上が平成8年当時の南水門部の踏査結果であるが、これは当地に構築された遺構の表面的観察であって、内部構造の観察がなされていなかった。その平成8年の踏査結果に内部構造の観察を付け加えることになったのが平成22年11月20日に実施した踏査結果である。

今回の踏査の際、最初に注目したのが、2箇所の水門と想定していた遺構の間に所在するテラス状遺構の層位(南北方向の断面)であった(写真7)。平成8年当時、このテラス状遺構についてはあまり注目していなかった。ところが、その後の踏査の結果、石材の組まれている南北幅が北水門部のそれとほぼ同規格(約9m)であることが判明した。そのことをふまえて今回テラス状遺構の層位を東西両サイドからあらためて観察すると、断面形が楕円形を呈する人頭大の石材が自然堆積ではなく人為的に組まれていることが判明した(写真8)。過去の周辺における踏査結果と照合して自然の堆積とは考えにくく、また、北水門部にも同様な石材が裏込石として整然と組まれているのが排水口から一部観察できることから、このテラス状遺構は石塁内部の一部であり、南水門部は裏込石として人頭大の石材が整然と組まれ、充填されていたことが想定された。

さらに、昭和35年の林道拡張に伴う南水門部の調査の結果、谷部にはかなりの土砂が堆積していることが推測され、このことを踏まえると、現時点で確認できる南水門部の2箇所の水門遺構は北水門部の上部2つの水門遺構(オーバーフローした水流に対して対応する水樋)と同様なものと考えることができる。南水門部の遺構は土砂でか



写真4 東側水門遺構（北より）



（参考 昭和55年時点の東側水門遺構（北より））



写真5 散乱する石材（東より）



写真6 西側水門遺構の南側端部（南より）



（参考 昭和55年時点の西側水門遺構の北側端部（北より））

なりの部分がかくれていると考えられ、今後その全容が判明するためにもさらなる調査・研究が待たれる。

ただし、分散している石材の量を考慮すると、未完成（計画途中）で終わった可能性が高いと考えられる。

（２）．南水門部の築城当初の姿について

平成22年までの南水門部の踏査結果をふまえて整理すると以下ようになる。

①．平成8年当時、別々の遺構と想定していた南水門部の2箇所の水門遺構は1基の東西長約30m、南北長約9mと想定される石塁（第2図）の入水口（オーバーフローした水流に対して対応する入水口）であった可能性が高い。北水門部と同様に、南水門部にも2つ以上の入水口が設けられた大規模な石塁が1基構築される予定であったが、未完成で終わった可能性が高い。

②．南水門部の石塁は北水門と同様に「重箱積」ではなく「布積」工法で築かれ、その裏込石は小石の礫ではなく、断面形が楕円形を呈する人頭大の石材が整然と組まれ、充填されていたと考えられる。

以上の踏査結果から、築城当初において南水門部にも北水門部のように2つ以上の入水口が設けられた大規模な石塁が1基構築される予定であったが、未完成で終わっているようである。その石塁は北水門と同様に「重箱積」ではなく「布積」工法で築かれ、その内部には裏込石として断面形が楕円形を呈する人頭大の石材が整然と組まれ、充填されていたと考えられる。

なお、先にも説明したように、雷山神籠石は林道拡張のための一部の調査を除いて本格的な発掘調査は行われていない。この小稿で言及したことはすべて踏査によるものである。したがって、将来発掘調査等によって、それぞれの遺構の解釈が変わってくる可能性も否定できない。

そのため小稿では現在判明していることのみを列挙し、あえて他の神籠石との比較や雷山神籠石の位置付け等を行わなかった。



写真7 テラス状遺構の層位（南北方向）（南より）



写真8 テラス状遺構の層位（近景）（南より）

Ⅳ. 雷山神籠石に関する交通路について

研究史でも説明した様に、雷山神籠石については昭和35年の林道拡幅に伴う南水門部の一部の調査を除き、ほとんど手つかずの状態にある。そのため、踏査等を実施して遺構の確認に努めているのであるが、情報不足で雷山神籠石の全体像を把握するには難しい状況にある。

ただし、幸運なことに『筑前国統風土記』をはじめとする文献資料のなかに、雷山神籠石は記録されており、その中に雷山神籠石を解明するためのヒントが隠れていると考える。

そこでこの項においては『筑前国統風土記』等の文献史料にも着目し、それから見える交通路に視点を置き、交通的視点からその築城目的など探っていきたい。

(1). 雷山神籠石の北側を走る弥生時代の幹線道路「日向峠越えルート」

『魏志倭人伝』によると、末盧国、伊都国、奴国、不弥国等の記述が確認できる。唐津市付近（末盧国）、糸島市付近（伊都国）、春日、福岡市付近（奴国）等の遺跡分布をみると、各平野の中心的な遺跡は一本のルートで結ぶことができる。現在、唐津から海岸沿いに深江にいたると、ここを起点とする県道（大野城・二丈線）によって日向峠越えて春日市須玖にいたる。さらに、県道を東に進むと、宇美町を經由してショウケ越えて飯塚市にいたる。宇美は文献の上で、また立岩遺跡の位置する飯塚は考古学的に、それぞれ「不弥国」に比定されることが多い。こうしてみると、末盧国→伊都国→奴国→不弥国は一本のルートで結ばれ、そこに当時の交通路が浮かび上がってくる。

ところで、この末盧国から不弥国にいたる弥生時代の幹線道路に沿って神功皇后伝承（『日本書紀』、『古事記』に限定）に関する遺称地が分布していることを指摘できる（第3図）¹²。そこで、『日本書紀』、『古事記』に限定して神功皇后伝承をみていくと、「深江」→「宇美」というようにその遺称地と児島・高倉両氏の想定する弥生時代の幹線道路¹³と一致してくる。あくまでも神功皇后伝承は史料としての信憑性を問われているため、それ自体は史実とはいえない。ただし『日本書紀』神功皇后39年条によると「魏志にいわく」という記述があることから、『日本書紀』の編者は『魏

志倭人伝』を理解した上で、編集したことがうかがわれる。このことから、糸島市二丈深江から日向峠を經由して飯塚市立岩へと続くルートは『魏志倭人伝』すなわち中国の歴史書に記録されている史実であった可能性がたかい。その史実を『日本書紀』の編者が国家的意図の下で「神功皇后伝承」として書き換えられたのではなかろうか。そのため史実として記録にのこらなかったと理解できる¹⁴。

なお、このルートは古墳時代を経て、奈良時代まで存続している。その証として当該ルートを介して、その周辺部に磐井の乱後、肥君一族が進出しており¹⁵、さらに、雷山神籠石、怡土城、大野城等が築城されている（第4図）¹⁶。

なかでも、怡土城に絞ってみていくと、海岸部に新設された奈良時代の「官道」と「日向峠越えルート」との三角州的位置に築城されている。また、怡土城の望楼は両ルートを見渡することができる位置に設置されており¹⁷、このことから「日向峠越えルート」は時代を経ても新設の「官道」と同じくらい重要視されていたことがわかる¹⁸。

(2). 雷山神籠石と肥前地域への道路との関係

次は、雷山神籠石と肥前地域への道路との関係について考えることにする。最初に『筑前国統風土記』の「雷山」の部分で注目すべき記述があるので紹介することにする。記述は「雷村より肥前国無津呂村に越える道一里許有。其の間に大たうげとて坂あり。」となっている。

また、『筑前国統風土記拾遺』の「雷山村」の部分で、「国境の小字六所あり。扇平 ユウスリ 大谷 大谷辻 エゲ 大峠等なり（大峠より無都呂に通ふ小道あり）」という記述もある。これを地形図（明治33年大日本帝国陸地測量部測量同35年製版）（第5図）におとして復元すると¹⁹、雷山神籠石を挟んで二つのルートが現れる。

一つ目は『筑前国統風土記』の「雷山」および『筑前国統風土記拾遺』の「雷山村」の部分から復元したルートである。これは雷山神籠石の東側に位置し、高野から千如寺、雷神社を經由して大峠に向かうルートである。北側は「日向峠越えルート」に接続し、南側は国境を越え長野峠と合流し、肥前地域へと抜ける。

二つ目は雷山神籠石の西側に位置する長野峠²⁰

である。これも北側は「日向峠越えルート」に接続し、南側は国境を越えて、高野から千如寺、雷神社を経由して大峠に向かうルートと合流し、肥前地域へと抜ける。

この二つのルートは共に北側では「日向峠越えルート」に接続し、南側では国境を越えて合流し、肥前地域へ抜ける。その糸島地域と肥前地域とを結ぶ両ルートと「日向峠越えルート」に囲まれた場所に雷山神籠石は築城されている。この三つのルートと雷山神籠石が築城された位置とは何等かの関係がありそうだ。

(3)．雷山神籠石の築城目的について

前項でも説明したように、雷山神籠石の北側は怡土平野が広がり、眼下には「日向峠越えルート」が走る。その東西方向には糸島地域と肥前地域を結ぶ二つのルートが走る。そして南側において、この二つのルートは国境を越えて合流し、肥前地方に抜けるが、さらに南に下ると後の「肥前国府」に至り、「帯隈山神籠石」へと繋がる。

以上の諸条件から、雷山神籠石は怡土平野のみならず、糸島地域と肥前地域とを結ぶルートを押さえることのできる要害の地に位置することがわかる。

ところで、8世紀になると「日向峠越えルート」沿いに「怡土城」が築城される。その築城理由として主に①安祿山の乱に備えて築城されたとする説、②新羅征討計画の一環として築城されたとする説とに集約され、今日では②の説が主流になりつつある。なお、怡土城の防衛面が強く肥前方面を意識していること、そして日本古代史において、日本と朝鮮半島との関係悪化に伴い肥前地方には朝鮮半島側に内応する等の反政府的行動がみられる特質も指摘されていることも考慮して、②の説に準拠しながら肥前地方における反政府的行動も軍事的視野に入れて築城されたと考える説もある²¹。

この肥前地方における反政府的行動を軍事的視野に入れて築城されたと考える説に基づいて考えると、「日向峠越えルート」に接続する肥前地方からの二つのルートはその重要性を増してくる。さらに「日向峠越えルート」と糸島地域と肥前地域とを結ぶ二つのルートに囲まれる場所に築城された雷山神籠石は、その三つのルートを押さえることができるのである。このことを踏まえると、

雷山神籠石は当初、糸島地域と肥前地域とを結ぶ交通の要衝を押さえるために築城され、その重要性から怡土城の時代にも怡土城を補完する軍事的施設（烽火など）として機能していたと考えてもよいのではなかろうか。

(4)．雷山神籠石の城門想定地と麓の集落とを繋ぐ道について

地形図（第1、5図）によると、雷山神籠石の土塁想定ラインの一部において地形的に窪んでいる箇所を確認できる。その箇所は土塁線想定ラインの西端部に位置し、そこから現飯原集落へと一つの道がのびている。

前項まで雷山神籠石を中心として東西両側に二つのルートが南北方向に走り、糸島地域と肥前地域とを繋いでいることを紹介したが、この項においては雷山神籠石とその西麓に位置する長野川流域の集落とを結ぶ道について考えてみたい。

前でも説明したように、地形的に窪んだ場所から西麓に向かって東西方向に一つの道がのび、それを辿ると現飯原集落に至る。その窪んだ場所は雷山神籠石の城門と想定され、そこから繋がる現飯原、長野、川付、そして雷山神籠石の東側に位置する雷山地区等の集落一帯は奈良から平安時代にかけて「長野郷」が設置されたと考えられている²²。また、遺跡の分布状況から、なかでも現飯原、長野、川付地区は「長野郷」の中心部であったと考えることができる²³。

雷山神籠石をはじめとする神籠石系山城については、いつ頃、誰が、どのような目的で築城されたか定かではない。そのため築城を命じた主体など不明なことも多いが、築城するには人力（労働力）等が必要であった。

まず、その負担を強いられたのは雷山神籠石周辺地域の集落と推測され、糸島地域と肥前地域とを繋ぐ二つのルート周辺の遺跡の分布状況から考えると、雷山神籠石の西麓に位置し、「長野郷」の中心部であった集落（現飯原、長野、川付集落一帯）がその一つであったと考えられる。

そのために、雷山神籠石には西側端部に城門の一つが構築され、築城の際、有事の際にも当該地区の人々がその城門につながるこの道を通して出入りしたのであろう。

ただし、遺構の残存状況から雷山神籠石は未完

成で廃棄されたと考えられており、このことを踏まえると、この城門もどこまで構築されたのか不明である。

V. おわりに

この小稿は平成22年（2010）11月20日に実施した踏査結果と交通路に関する最新情報を整理したものである。ふと我に返ると、平成8（1996）年の踏査から約14年も年月が経過していた。その間、各地で古代山城の発掘調査が行われ、様々な調査結果（データなど）が蓄積されている。雷山神籠石についても、時間を見つけては踏査を継続し、若干の踏査結果を蓄積していたつもりでいたが、石材の組み方からの視点での踏査は全く行っていなかった。そのために、雷山神籠石の南水門部における2箇所の水門と想定していた2つの水門遺構は1基の石塁の入水口の可能性が高く、また、その内部構造に特徴が認められるという今回の踏査結果は特筆すべきと痛感させられ、整理した次第である。

その石材の組み方からの視点で改めて北水門部を観察すると、興味深いことに上段の排水口を境にして石材の組み方が異なっているのがわかる（写真9、10）。下層は一層ごとに大型の石材を組む工法を採っている。上層は一層ごとに下層より一回り小さい石材を組む工法を採っている。この違いは何を意味するのであろうか。今後、このテーマについても視野を広げて踏査を継続しつつ、雷山神籠石のみならず他の古代山城の調査・研究にも精進していきたいと思う。

最後に、この小稿を整理するにあたって、北垣聡一郎氏（石川県金沢城調査研究所）、田中俊明氏（滋賀県立大学）、向井一雄氏（古代山城研究会）、に多大なるご指導、ご助言及び貴重な関連資料を賜った。末尾ながら記してここに感謝の意を表し、この小稿のおわりとしたい。



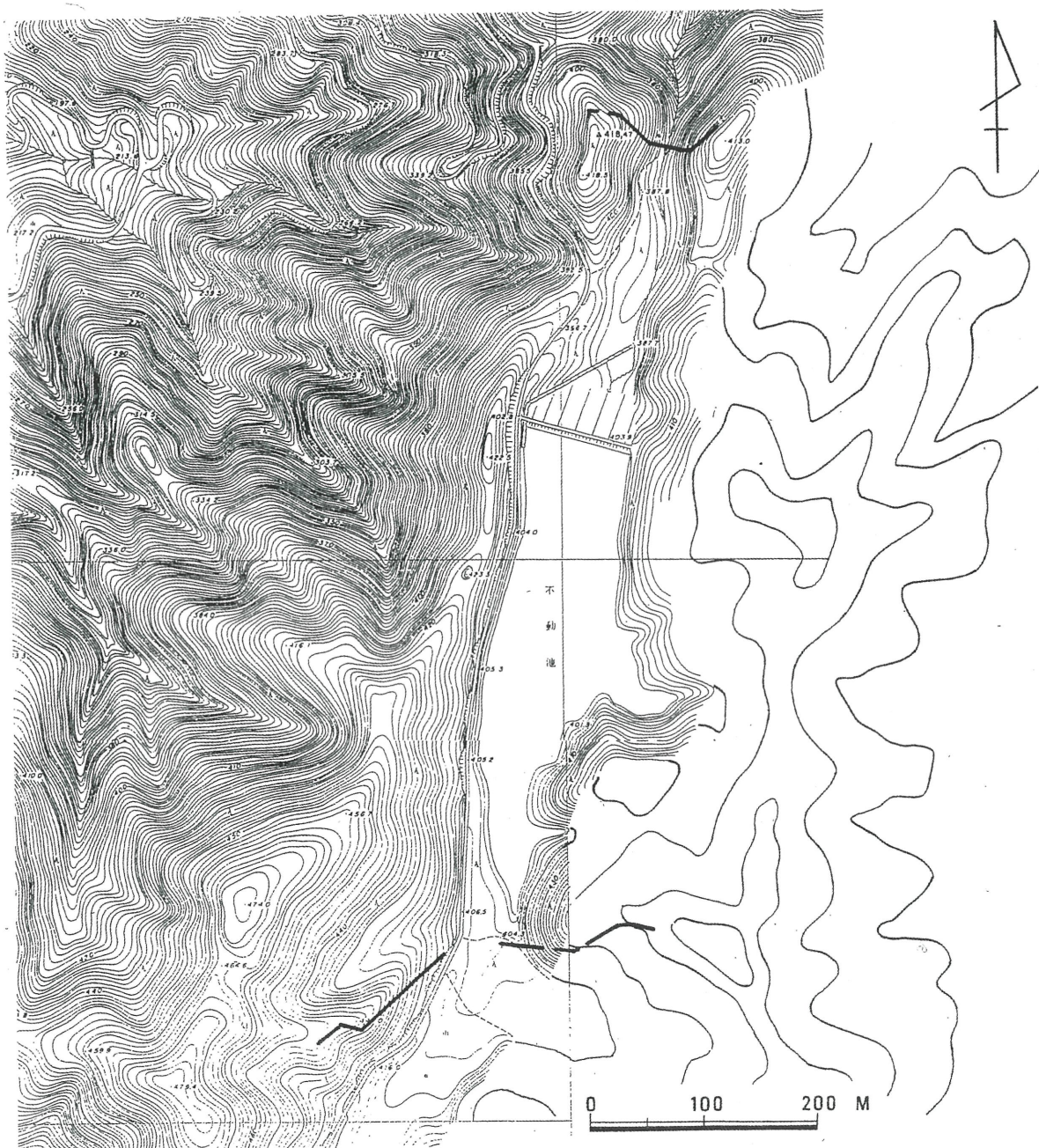
写真9 雷山神籠石北水門（城外側）（北より）



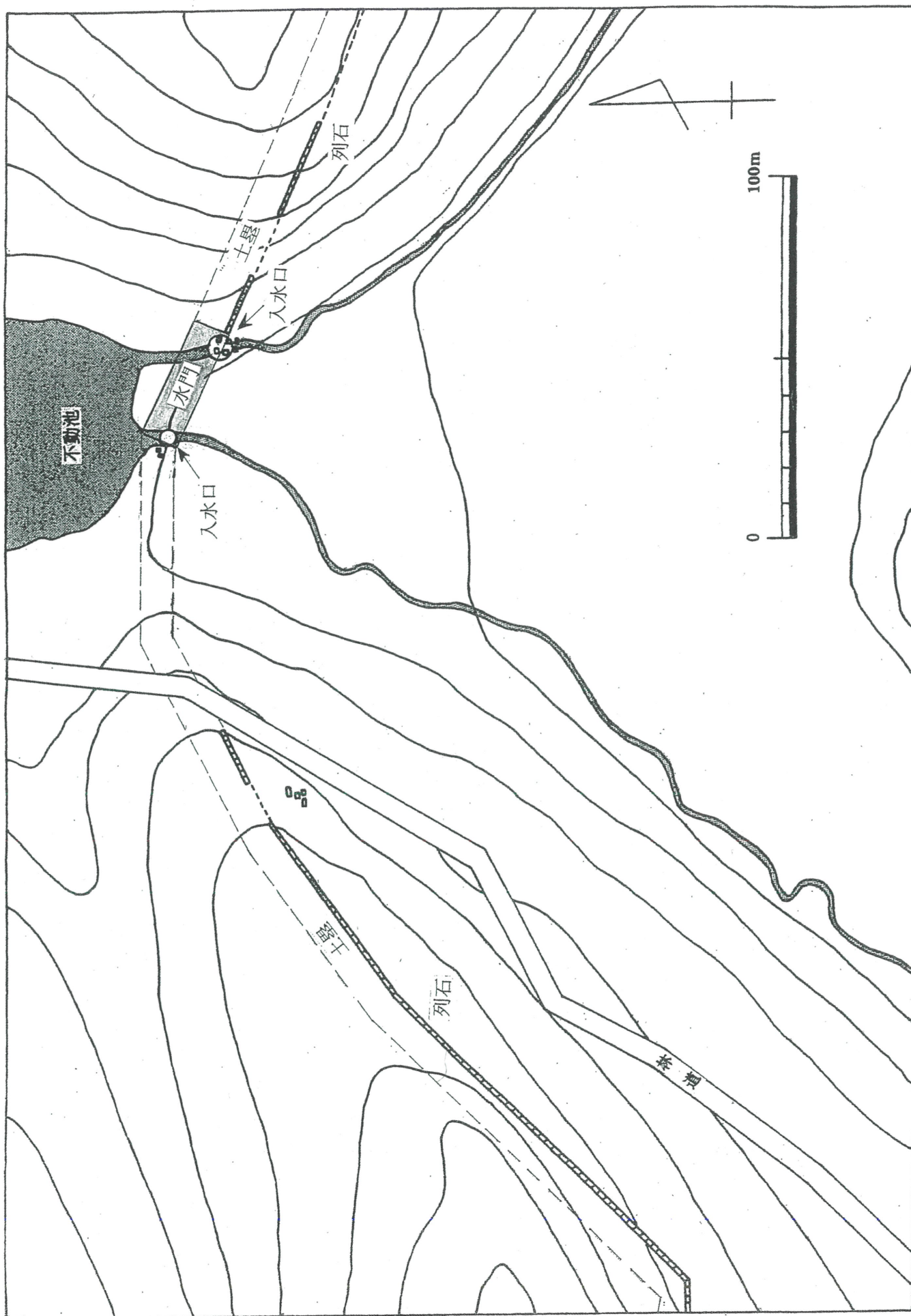
写真10 雷山神籠石北水門（城内側）（南より）

註

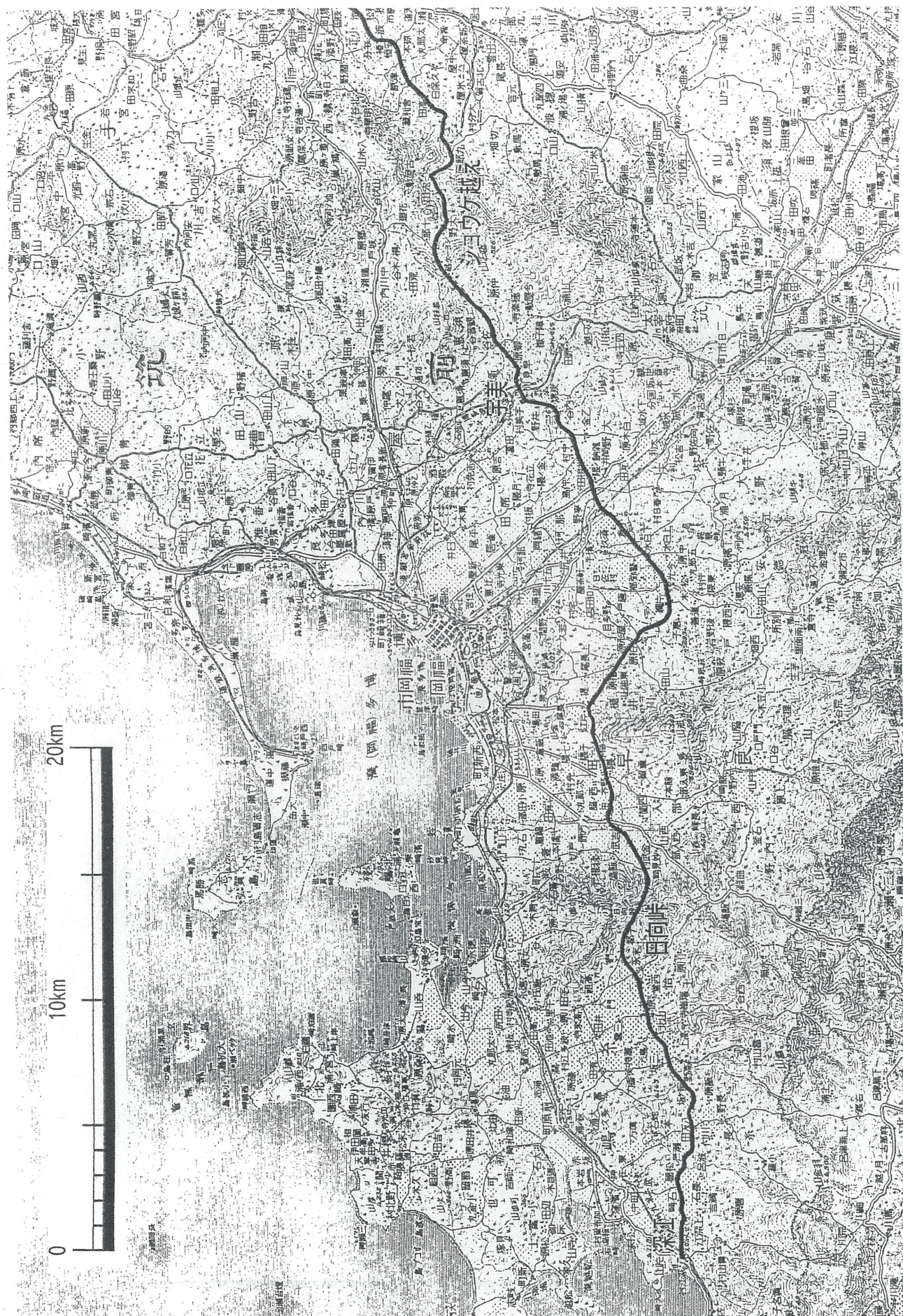
1. 今日までの調査・研究成果をふまえ「神籠石」の名称については、例えば「雷山神籠石」を「雷山城」というように表記をかえる傾向にあるが、この小稿においては指定名称に基づき「神籠石」の名称を使用することにする。
2. 『おつば山神籠石』佐賀県武雄市史跡報告（佐賀県武雄市・1965年）
3. 古代山城研究の動向と課題については向井一雄氏が「古代山城研究の動向と研究」（『溝瀆』・第9号・第10号合併号・古代山城研究会・2001年）で詳細に整理している。
4. 渡辺正氣「神籠石の築造年代」（『考古学叢考』中巻・斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編・吉川弘文館・1988年）
5. 長洋一「朝倉橘廣庭宮をめぐる諸問題」（『神戸女学院大学論集』第26巻・第3号・1980年）
6. 白石成二『永納山城と熟田津一伊予国からみた古代山城論一』（ソーシャル・リサーチ研究会・2007年）
狩野久「瀬戸内古代山城の時代―築造から廃止まで―」（『坪井清足先生卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざままで―』（坪井清足先生の卒寿をお祝いする会・2010年）
7. 小田部降叙『筑紫国神籠石』・1897年
8. 島田寅次郎「雷山神籠石（筒城）」（『福岡県史跡天然記念物調査報告』・第2集・1926年）
9. 原田大六「神籠石の諸問題」（『考古学研究』・第6巻第3号・1959年）
10. 原田大六「雷山神籠石の列石考」（『古代学研究』・第28号・1961年）
11. 瓜生秀文「雷山神籠石―現在までの調査から―」（『溝瀆』・第7号・古代山城研究会・1998年）
12. 長洋一氏のご教示による。
13. 児島隆人『立岩』（学生社・1969年）
高倉洋彰「九州本土とその周辺の弥生文化」（『日本歴史地図』原始・古代編〈上〉の解説・柏書房・1982年）
14. 瓜生秀文「神功皇后伝承覚書―神功皇后伝承で覆い隠された二つの史実―」（『筑紫野市史』資料編（上）考古資料・2001年）
15. 瓜生秀文「古代の御笠―筑前国御笠郡一帯への移住について―」（『筑紫野市史』資料編（上）考古資料・2001年）
16. 赤司善彦「北部九州の古代山城」（『シンポジウム記録4 激動の七世紀と古代山城・吉備の鉄』・考古学研究会・2004年）
17. 『国指定史跡 怡土城跡』（前原市文化財調査報告書第94集・前原市教育委員会・2006年）
18. 糸島市より日向峠を越えた福岡市早良区金武には「金武青木遺跡」があり、「怡土城」に関連する木簡が出土している。「日向峠越えルート」と「怡土城」との関係の一端を示す貴重な史料である。
『金武青木―金武青木A遺跡第一次調査・金武青木B遺跡第一・二次調査―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1164集・2012年）に収録。
19. 雷山神籠石は昭和7年に水門・列石の前後10mのみ国指定史跡として指定されている。そのため、雷山神籠石の城域内ではあるものの、指定地外であるその中心部に昭和9年の大渴水をうけて、「不動池」が造られる。その不動池の工事が入る前の地形を示す貴重な資料が明治33年大日本帝国陸地測量部の作成した地形図であり、当時の様子をよく伝えている。
20. 向井一雄氏は「西日本の古代山城遺跡（類型化と編年についての試論）」（『古代学研究』125号・古代学研究会・1991年）のなかで雷山神籠石が「長野峠越えルート」を押さえる位置にあることを指摘している。
21. 長洋一「天平宝字五年の肥前国」（『西南学院大学国際文化論集』1-6・1986年）
瓜生秀文「怡土城について―怡土城築城における人間模様―」（高倉洋彰編『東アジア古代文化論攷』・中国書店・2014年）
瓜生秀文「怡土城と吉備真備・佐伯今毛人」（『西日本文化』471号・西日本文化協会・2014年）
22. 『糸島郡誌』（糸島郡教育会編・1927年）によると、「日本地理誌」を引用して「小蔵、一貴山、川付、飯原、長野、雷山」の諸邑を「長野郷」の郷域としている。
23. 遺跡の分布状況等については岡部裕俊氏のご教示による。



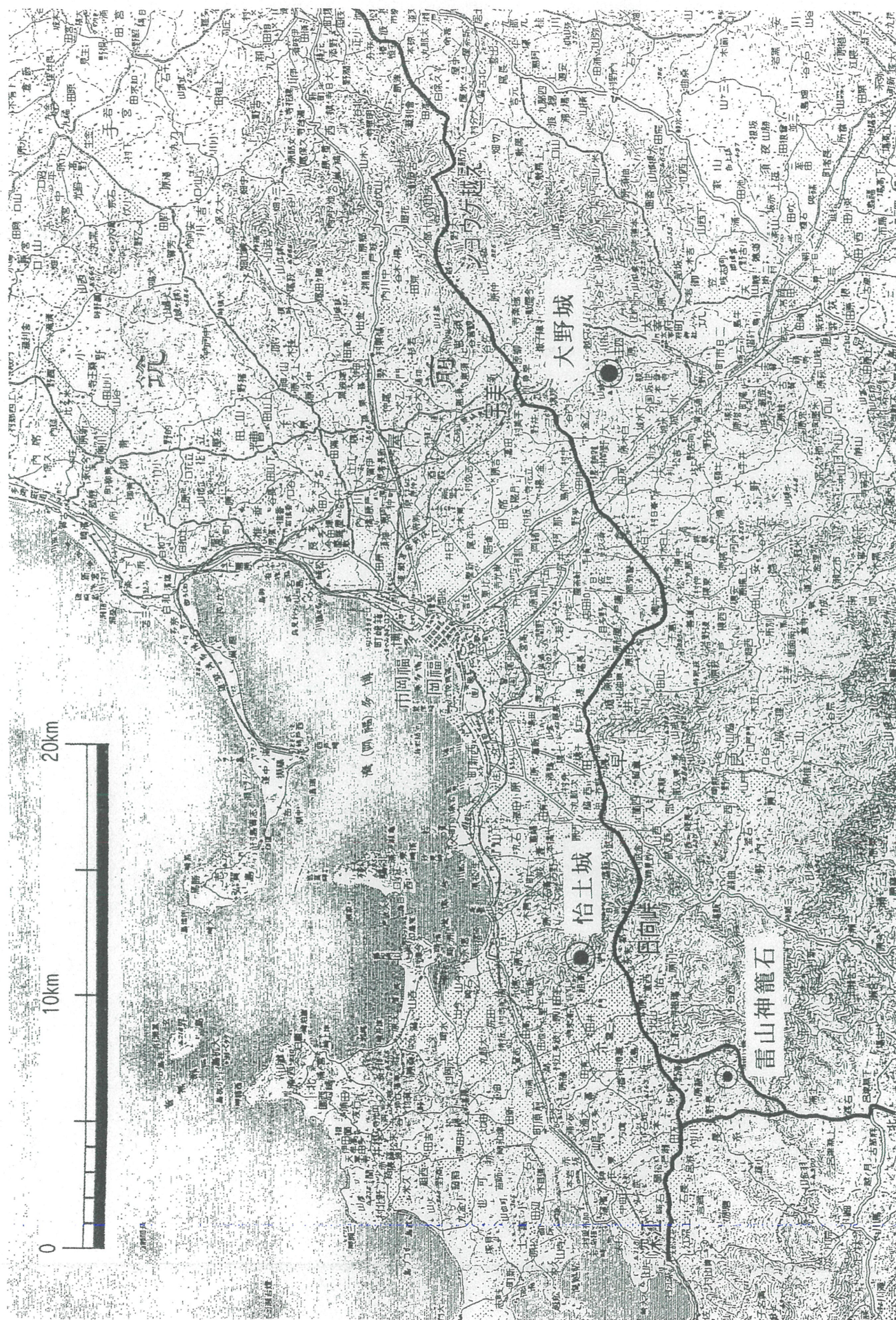
第1図 雷山神籠石遺構平面図



第2図 雷山神籠石南水門周辺遺構配置図



第3図 神功皇后伝承遺称地（『日本書紀』『古事記』に限定）に関する地名・遺跡



第4図 神功皇后伝承遺称地(『日本書紀』『古事記』に限定)に関する地名・遺跡

